

私のナホトカ

- イワン・イワノビッチだ。

港の荷役人夫の老人は名を名乗りながら、われこそ本物のロシア人と胸を張った。

ニッと笑うと、前歯はほとんどなく、日に焼けた顔が皺にすっかり埋まってしまうほどの歳だった。

ソ連晩期のこととて、港では朝からプーンと酒臭い人夫が多い中、その老人だけがきびきびと働き、日本人の私に何かとやさしくしてくれた。

老人と私はよく港の岸壁に並んで腰を掛け、お昼を分けあって食べたものだった。

そんなある日のことだった。老人がふといった。

「わしにもちょうどお前くらいのせがれがいてなあ。」

私は、ロシア語を習いたてで、どうにも б̄ыл̄ という過去形が気になってしかたなかった。

- いたって б̄ыл̄ ?

- 死んだんだ *Погиб̄。一言、老人は答えた。

- どこで。何気なく私は尋ねた。

老人は、一呼吸おいてしずかに口を開いた。

- 日本との戦いで。

老人と私は海のかなたをしばらく眺めていた。大空を白いカモメがいくつも遊弋し、その下にしずかな海がどこまでも続いていた。

老人の名イワン・イワノビッチは、ロシア人に典型的とされる名前。港は Находка (発見、発見物の意味) という名であった。

これが私にとって初めてのロシア体験である。

* Погиб. (He was killed.) 非業の死を遂げた。